

令和 2 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02388

研究課題名(和文) 黒川家旧蔵資料の調査研究 江戸期の知識流通体系及び古典学の形成基盤の解明

研究課題名(英文) Research of the Kurokawa house old storehouse document

研究代表者

木下 華子(Kinoshita, Hanako)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：10609605

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、江戸期から明治期にかけての国学者・蔵書家である黒川春村・真頼・真道の三代にわたって蒐集・蓄積された黒川家旧蔵資料群の書誌データの蓄積と、黒川家において醸成された江戸期知識層の学問(古典学)の解明を目的とする。本研究では、ノートルダム清心女子大学に分蔵される黒川家旧蔵の古典籍(和歌・歌論・物語を中心とする)の調査を行い、書誌事項と併せて、奥書・蔵書印・識語等の記載内容の修正を行った。具体的には、本研究に前接する科学研究費による研究等によって蓄積された調査カードを電子化したデータをもとに、それを追加・補完しつつ、将来の公開に備えたデータの整備・集成を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、黒川家旧蔵資料の分析とデータ整備・集成を通して、江戸期の知識流通と古典学の形成、近世知が近代国文学という学問を醸成する過程を、具体的なデータの収集と記述により明らかにした。黒川家の古典学の中心をなす和歌・歌論・歌学関係の蔵書群の中には、『古今和歌集講義』等、黒川家の学問を如実に反映するものが多い。また、黒川家旧蔵書は、明治期に出版された多くの叢書群の底本として活用されたため、黒川家の学問の具体的検討は近代国文学の形成の歴史の一端を繕うこととなる。また、一文庫に収蔵される古典籍の悉皆調査は、日本・地域の歴史資料・文化財を次世代に適切な形で伝えていくために欠かせない基礎作業である。

研究成果の概要(英文)：We studied the Kurokawas old storehouse document. The person of Kurokawa is 3s, Harumura, Mayori, Mamichi. They are a scholar of ancient Japanese thought and book collectors, from the last part of Edo era through the Meiji era. We investigated the old classical books which Notre Dame Seishin University possessed. The Kurokawas possessed those books. We investigated a bibliography matter in detail, and revised the result. We maintain the data which we collected, and we comprise it for the future exhibition.

研究分野：中世日本文学

キーワード：黒川家 国文学 国学 書誌学 蔵書

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景

前近代日本における知的活動の基盤は、現代のような「文学」「歴史」「美術」といった学問の枠組みによって縦断・細分化されたものではなく、和歌・漢詩文といった「古典」を中心として歴史・美術・思想・宗教などの諸分野にまたがる横断的・総合的なものであった。教養的とも捉え得る「知」のあり方やそれを基盤にした学問(古典学)は、江戸期の出版文化の隆盛によって広く拡散・浸透を遂げてゆくが、その具体的様相については、鈴木健一編『浸透する教養 江戸の出版文化という回路』(勉誠出版 2013)等に見えるように、近年大きな注目が集まっている。また、そのような「知」の形成を支えた書物の流通とその蓄積(蔵書の形成)についても、『創立100周年記念特別展 岩瀬文庫の100点』(岩瀬文庫2008)・雑誌『書物学』の創刊(勉誠出版 2014~)など、知識の源泉としての書籍とその動態への関心が急速に高まっている。すなわち、時代の「知」の現れとしての書物の集積を体系化し、流動・蓄積する書物の動態から近世的「知」のあり方を解明・研究することの重要性が、広く認識・共有されるようになったということである。

本研究では、上記の研究動向を踏まえ、江戸期における「知」の形成と流通を解明し、そこに立ち現れる学問(古典学)の様相と近代への展開に対して照射を試みる。具体的な対象となる資料は、ノートルダム清心女子大学、実践女子大学等に分蔵される近世後期の国学者・黒川春村(1799-1866)、真頼(1829-1906)、真道の三代により収集された蔵書群(主として物語・和歌とその注釈、享受・研究資料等の文学関係資料)である。黒川家旧蔵本については、柴田光彦『黒川文庫目録 本文編』(青裳堂 2000)、同『索引編』(青裳堂 2001)があり、数カ所に散在している黒川家旧蔵資料の全容を窺い知ることが可能となったが、同目録には、それぞれの書物が蓄積されるに至った経緯や流過程までは記されない。同書に指摘されるように、国学者一族の数代にわたる蔵書の全容が知られるものは比較的まれである。すなわち、黒川家旧蔵資料を対象とした上記の作業と検討は、思想面の達成にのみ関心が向けられてきた「国学者」の研究において、知的活動の基盤となった「知」の形成と流通の具体相及び全容を解明する発展性をもった研究だと考えた次第である。

また、本研究の代表者・分担者が実施した黒川家蔵書群の個別の書誌学的調査(科研費・基盤研究(C)「黒川家旧蔵資料の書誌的調査に基づく古典学の形成と知識流通に関する調査研究」課題番号:24520262)では、調査データの作成が終わり、今後のデータのブラッシュアップ・体系化を経て公開を俟つ段階に至った。本研究では、このデータをもとに、個々の資料の相関関係及び他機関が所蔵する黒川家旧蔵資料(実践女子大学所蔵の物語・随筆関係資料等)との関係を見出し、黒川家を通して江戸期に醸成された近世的「知」の流通の様相とそこから形成された古典学の全体像を解明する。具体的には、奥書・識語と蔵書印の集成を通して、黒川家に蓄積された書物の流通経路を明らかにし、「知」の流通の具体相の総体的把握を試みる。

2. 研究の目的

本研究の対象は、江戸期から明治期にかけての国学者・蔵書家である黒川春村・真頼・真道の三代にわたって蒐集・蓄積された黒川家旧蔵資料群と、黒川家において醸成された江戸期知識層の学問(古典学)である。本研究では、書誌学的調査によって得られた奥書・識語・蔵書印等の集成をもとに、同時代の書物の流通と収集の過程を解明し、書籍の書き入れや同時代の学者・蔵書家たちの交流からうかがわれる学問の諸相を描き出す。また、黒川家代々が編纂に携わった江

戸末期から明治期にかけての叢書類(丹鶴叢書・国史大観など)と黒川家旧蔵資料群の関係を検討し、江戸期の古典学が近代の知識体系・学問の枠組みに対していかに関与し形成を行うのか、その具体的様相の解明を試みる。

3. 研究の方法

本研究は、江戸後期から明治期にかけての蔵書家・国学者であった黒川春村・真頼・真道の三代にわたり蓄積された蔵書群を対象とする。書誌学的調査から得られたデータと奥書・印記集成をもとに、「書物の収集と流過程」「同時代の蔵書家・学者の交流関係」を解明し、「江戸後期における知識の流通と古典学の形成」「近世 知 の近代国文学への展開」を具体的に記述する。研究の核となるテーマは下記の4点である。

- (1) 江戸期知識階層のネットワークとその具体相に関する検討
- (2) 江戸期知識階層の古典学の基盤形成と流通に関する検討
- (3) 非文字情報の集成・分析を通じた江戸後期の蔵書形成に関する書誌学的検討
- (4) 近世 知 と近代国文学との関係の検討

(1)江戸後期知識階層の一典型としての黒川家蔵書の形成に関する基盤的調査と検討を行う。国学者の蔵書が形成される要件として、国学者間相互の書籍の貸与や書写活動といったものが注目される。黒川文庫本の中にも、同時期の国学者である村田春海(1746-1811)、岸本由豆流(1789-1846)などに関係する書籍があり、書籍を介した 知 の流通が認められる。しかしながら、先行研究においては個別事例の報告に留まるものが多い。対して、本研究が対象とする黒川家蔵書は、国学者の蔵書としての総体的データの提供を可能にする。稀に見る好例だろう。(1)では、本研究に前接する科研費による研究等によって蓄積された書誌データをもとに、当該資料の奥書・識語集成と蔵書印集成を作成し、その作業を通して書物の流通に関する具体的データを収集する。その上で黒川家に蓄積される至った書物と 知 のネットワークの具体相を明らかにする。

(2)国学者の蔵書の特徴をなす繁多な書き入れや注釈を持つ学問テキスト群について検討を行い、黒川家の古典学の形成と流通のあり方について論じる。書き入れ注記については、ある特定の学派の学説の流通とその拡がり(例えば、本居宣長の学説の継承とその展開、及び影響など)についての検討は多く行われてきたが、一つのまとまった蔵書群を対象として、そこに集積された学問の質と量とを具体的資料をもって示した研究は多くない。黒川家旧蔵書の中には、上述のように村田春海・岸本由豆流等の注説の書き入れをもつ伝本が複数認められる。国学者の学問がどのような先行の説や時代性を基盤として形成・流通するのか、その様相を具体的・複眼的に描き出すことが可能となる。 (2)では上記のような学問テキストを集中的に調査し、黒川家の古典学への影響が想定されるテキストの流過程について記述し、黒川家の古典学の形成を検討する。

(3)ノートルダム清心女子大学に所蔵される黒川文庫本には、奥書・識語や蔵書印といった情報のみからでは窺い知ることのできない特徴を記す書物が含まれている。書物の書誌的特徴(紙の質や装丁、書写される文字の特徴等)から判断して、元来は国学者以外(例えば公家や武家)のもとに所蔵された書物と推測される例が認められる。こうした例においては、文字情報のみならず、装丁や紙質、表紙文様といった情報が重要なデータとなる。(3)では、そうした非文字情報のデータ化とその総体的蓄積及び分析を行う。

(4)ノートルダム清心女子大学に収められる黒川家の古典学の中心をなす和歌・歌論・歌学関係の蔵書群の中には、『古今和歌集講義』等、黒川家の学問を如実に反映するものが多い。これらの学問テキストに見える学説の分析を行い、黒川家の学問の具体相を解明する。また、黒川家旧

蔵書は、明治期に出版された物語注釈書や有職関係書、和歌関係書の底本とされることも多く（『夫木和歌抄』国書刊行会 1906 等）、黒川家の学問の具体的検討は、近代国文学の形成の歴史の一端を具体的に窺う作業となろう。(4)では、黒川家に蓄積された 知・古典学が近代国文学という学問へ発展・継承されてゆく過程についても検討と記述を試みる。

4. 研究成果

上記(1)～(3)については、いずれもノートルダム清心女子大学附属図書館特殊文庫での古典籍の調査とそこから得られた書誌情報の集積・精査を基盤とする。研究代表者・分担者はそれぞれ、分担した古典籍の書誌調査を継続し、併せて奥書・蔵書印・識語等の記載内容の集成を行った。これらのデータは、研究代表者と分担者が excel ファイルを共有し、都度アップデートをはかっている。表紙・奥書・蔵書印・識語等の書誌情報については、文字テキストのみならず、デジタル写真によって画像資料の集成も行っている。デジタル写真は、非文字情報のデータ化と蓄積を可能にするため、本研究では積極的に画像データによる情報の集積を推進した。一資料の写真をまとめて PDF 化し、整理・分類をはかりやすい形で集積を行っている。このような形での調査・集積を進めた結果、本研究において、ノートルダム清心女子大学所蔵分 1080 点余りのうち、およそ半数強（600 点ほど）の調査と分析を達成した。また(4)については、黒川真頼・真道の学問を反映する注釈書・講義書等を検討の対象とし、具体的には『古今和歌集講義』などの翻刻を行い、発表を待機している。それに先立つものとして、ノートルダム清心女子大学の HP で、定期的に古典籍の紹介を行い、一般に供することとした。

本研究の成果として、研究代表者・分担者それぞれは 14 本の論文と 4 冊の図書を刊行した。特に、本研究における書誌調査や書誌学的知見の集積を基盤として成った代表的成果としては、木下「災害を記すこと 『方丈記』「元暦の大地震」について」（2020）、海野「中世写本における文字・書風・形態」（2019）、新美『源氏物語 本文研究の可能性』（2020）などが挙げられる。

また、本研究の成果を一般に公開する一つの試みとして、2018 年 10 月にノートルダム清心女子大学を会場として開催された中古文学会秋季大会において資料展覧を行い、特殊文庫に収められた黒川家の旧蔵資料を詳細な解説パンフレットを作成した上で展示した。この展覧は、学会員のみならず、岡山市や香川県高松市などでも紹介を行い、日本の古典文学・古典籍に関心を持つ一般の方々の閲覧を実現した。作成した解説パンフレット（非売品）には、本研究で集成したデジタル写真を多く使用し、調査によって得られた書誌情報を一般の方々にもわかりやすい形で記載した。このパンフレットは来訪者全員に配布し、大きな好評を得たことを記しておく。本研究が対象として古典籍は大学が所蔵する貴重資料であるが、地域・国の歴史的財産でもある。本研究の推進過程においてこのような機会を得られたことは、研究成果の一般公開・社会還元という点において、一定の効果を上げられたことは喜ばしいことであった。

さらに、本研究では、研究代表者・分担者それぞれが、国際学会での研究発表を積極的に行った。2018 年度の木下「『方丈記』の時間 「朧化」をめぐる」（2018 年度輔仁大学日本語学学科創立 50 周年・台湾日本語文学会創立 30 周年記念国際シンポジウム）、同年度の海野「Medieval Knowledge and Waka Commentaries」（WAKA WORKSHOP X: Exploring Waka Culture across Genres, Media, and Periods）、同じく新美「江戸時代の俗語訳『源氏物語』について～『紫文蚕之囀』を中心に～」(第 12 回ブラジル日本研究国際学会・第 25 回全伯日本語・日本文学・日本文化学会)、2017 年度の新美「Text and Image in

Baio's versions of The Tale of Genji」(International Conference of the European Association for Japanese Studies)である。本研究における書誌学的知見に基づく内容を国際的な場で発表する機会を多く得たことは、日本文学研究・書誌学研究を世界へ発信する階梯となるものだと考える。

なお、本研究の実施期間において、2018年7月には西日本豪雨災害が発生し、ノートルダム清心女子大学が位置する岡山県は甚大な被害をこうむった。このことにより、特殊文庫での古典籍の調査に大きな影響が出て、本研究の推進に遅延が生じた。また、研究機関を延長した2019年度は、代表者が所属大学を変更、定期的な調査の実行が困難となってしまった。さらに、年度の後半は研究のまとめ・講演等での成果発表を予定していたが、2020年1月からの新型コロナウイルス感染症(covid-19)の世界的拡大によって、研究者の移動が大きく妨げられ、研究成果報告の一環として予定していた2020年3月の講演等を全てキャンセルせざるを得なくなった。研究計画の最終段階においてまことに残念な事態が連続して出来したが、蓄積した書誌情報及び奥書についてはデータベース化しての公開、また蔵書印関係の情報について、国文学研究資料館のHP上での公開を目指し、今後も継続して環境を整えていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 木下華子	4. 巻 13
2. 論文標題 災害を記すこと 『方丈記』 「元暦の大地震」について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 55 - 68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下華子	4. 巻 33
2. 論文標題 数寄者と中世文学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要・文化交流研究	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野圭介	4. 巻 12
2. 論文標題 中世写本における文字・書風・形態	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 pp.56-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 新美哲彦	4. 巻 188
2. 論文標題 『我が身にたどる姫君』の成立時期	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国文学研究	6. 最初と最後の頁 pp. 49-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下華子	4. 巻 95-11
2. 論文標題 『西行物語』構想の方法 名所歌との関連をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 92-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下華子	4. 巻 1
2. 論文標題 『発心集』蓮華城入水説話をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倉本一宏編『説話研究を拓く 説話文学と歴史資料の間に』	6. 最初と最後の頁 389-410
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新美哲彦	4. 巻 63
2. 論文標題 作り物語の和歌的表現 中世王朝物語を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中世文学	6. 最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新美哲彦	4. 巻 2
2. 論文標題 紫式部像の変遷 文の人のイメージ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本「文」学史	6. 最初と最後の頁 110-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下華子	4. 巻 8
2. 論文標題 道程を叙述する文体 『山家集』中国・四国関係歌群と『無名抄』から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西行学	6. 最初と最後の頁 34-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下華子	4. 巻 2
2. 論文標題 『源家長日記』における具親召籠事件について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤實久美子	4. 巻 なし
2. 論文標題 三都の本屋仲間	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 横田冬彦編 『シリーズ<本の文化史>4 出版と流通』(平凡社)	6. 最初と最後の頁 29-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤實久美子	4. 巻 なし
2. 論文標題 嵯峨本をめぐる諸説と謄本「うきふね」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 富田ゆり編 『辻邦生－春の戴冠・嵯峨野明月記』 展開催記念冊子(学習院大学史料館)	6. 最初と最後の頁 14-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤實久美子	4. 巻 198
2. 論文標題 『本朝通鑑』の編修とその時代	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『アジア遊学ー海を渡る史書ー』	6. 最初と最後の頁 136-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新美哲彦	4. 巻 97
2. 論文標題 シンポジウム「室町戦国期の『源氏物語』 本の流通・注の伝播」趣旨説明	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『中古文学』	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 木下華子
2. 発表標題 『西行物語』構想の方法ー名所歌との関連をめぐって
3. 学会等名 東京大学中世文学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木下華子
2. 発表標題 『方丈記』の時間 「朧化」をめぐって
3. 学会等名 2018年度輔仁大学日本語学学科創立50周年・台湾日本語学会創立30周年記念国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 海野圭介
2. 発表標題 Medieval Knowledge and Waka Commentaries
3. 学会等名 WAKA WORKSHOP X: Exploring Waka Culture across Genres, Media, and Periods (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 新美哲彦
2. 発表標題 江戸時代の俗語訳『源氏物語』について～『紫文蚕之囀』を中心に～
3. 学会等名 第12回ブラジル日本研究国際学会・第25回全伯日本語・日本文学・日本文化学会(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤實久美子
2. 発表標題 公家鑑の資料学的検討
3. 学会等名 近世の天皇・朝廷研究第7回大会(朝幕研究会主催)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 新美哲彦
2. 発表標題 中世王朝物語と和歌
3. 学会等名 中世文学会春季大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 新美哲彦
2. 発表標題 Text and Image in Baio's versions of The Tale of Genji
3. 学会等名 International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木下華子
2. 発表標題 鴨長明の芸能性
3. 学会等名 第4回世界遺産で語る糺猿楽シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 木下華子
2. 発表標題 道程を叙述する文体 『山家集』中国・四国関係歌群と『無名抄』から
3. 学会等名 西行学会(招待講演)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 新美哲彦(他5名・共著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 266
3. 書名 『源氏物語 本文研究の可能性』	

1. 著者名 新美哲彦（他3名・共著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 752
3. 書名 『源氏物語の近世 俗語訳・翻案・絵入本でよむ古典』	

1. 著者名 木下華子（他5名・共著）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 明治書院	5. 総ページ数 576
3. 書名 『正治二年院初度百首』	

1. 著者名 木下華子（神戸説話研究会・共著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 568
3. 書名 近世寺社伝資料『和州寺社記』・『伽藍開基記』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>N.D.S.U Collection (37) 伝山崎宗鑑筆『古今和歌集』 http://lib.ndsu.ac.jp/collection/pdf/collection_37.pdf N.D.S.U.Collection [34] 黒川文庫・黒川真頼『古今和歌集講義』 http://lib.ndsu.ac.jp/collection/pdf/collection_34.pdf 「建長二年・建治二年奥書『金葉和歌集』」 http://lib.ndsu.ac.jp/collection/pdf/collection_31.pdf</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	海野 圭介 (Unno Keisuke) (80346155)	国文学研究資料館・研究部・教授 (62608)	
研究分担者	藤實 久美子 (Fujizane Kumiko) (90337907)	ノートルダム清心女子大学・文学部・教授 (35305)	
研究分担者	新美 哲彦 (Niimi Akihiko) (90390492)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授 (32689)	